

私と酒の三太郎

佐々木正芳

もう大部前の事になる。私がポーランドから帰って間もない頃だから六年前の暮れの事だろう。亡くなった浜田先生が着流しに白髪と白い襟巻をなびかせてやって来た。あの堂に入った着物姿には似合わなかったが、土産のウオトカをすゝめ談笑している内に、私は三太郎を描くはめになっていたのである。彼の来訪の目的はそこにあった。この時から私と三太郎の付き合いが始まる。次の正月、まる一ヶ月没頭して私は三太郎を描き上げた。尤も、この時の話はこの度のものは大部違う。この再話に創作と云う名の尾ひれがつき、話の展開はドラマチックでそれなりに面白かったが、その違和感が否めなかった。結局、奇妙な紆余曲折の果て、その話はオクラになった。それから五年、数十枚のデッサンと共に、三太郎は私のアトリエの棚に眠っていた。だから、この度、この話を採集された徳夫先生の直接の再話を得て世に出る三太郎に、私は感無量のものがある。

絵は全部描き直し、いや新しく描いた。然し、民話そのものとして、つまり三太郎が本来の姿で眠りを覚ました事は、この話にとって幸いであった。伝承には歴史がある。語りついで農民の生活と心と願いを背負っている。描きながら私はそれを思った。

この絵は色紙に和筆で描いた。日頃、描線をころして、ノッペラボーやはげ頭のじつと動かぬ後ろ姿などばかり描いている為もあって、こゝでは描線を生かし、思い切り筆を走らせてみたかった。この話の底を流れるヴァイタルな土の臭いを描いてみたかった。表現に当たって、私は所謂童画を念頭から消そうと努めた。二十数年、児童画指導と幼稚園を生業として来た私は、子供と絵本の関係を日常かなり身近に感じている。

子供が絵に向ける眼は、かなり鋭い。そして、絵に抱く期待は、与える側と大部喰い違っているのを感じる。子供に与える絵と云う通念、これはきつと間違っている。子供だから…と云う必要は無い、むしろ子供だからこそ、作家の個性あふれる本当の絵を見せるべきではないだろうか。その意味で、私は出来ないまでも、北斎を念頭に置いた。結局、その偉大さを改めて思い知らされたのではあるが。

ところで、じっくり付き合ってみた三太郎は実に面白い話である。勞せずして大収穫、一もうけして一っばい。これは太陽と水を頼りに生きる百姓の夢に違いない。現実には、勞せど冷害に泣く東北の農民、それは今日も変わらない。そう云えば、何と象徴的な話だろう。三太郎は町へ出稼ぎに行くではないか。私も宮城の百姓の孫である。親父は農家の次三男の典型を生き兵隊で死んだ。酒この好きなのは三太郎ばかりぢやない。描く程に親近感がつり、最後は自画像を描いてる感じがした。そして思った、まてよ、刃をふり上げたまま、やり場のない気持ちをぶつけてるのが私の本腰入れている絵ぢやないか……。

「やあや 三太郎さん いっぺえやっぺや」

